

Ouroboros

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

Mar. 31, 2024

東京大学総合研究博物館ニュース

The University Museum, The University of Tokyo



総合研究博物館の新規収蔵資料となった山田壽雄作ラン科植物画より。セッコク属2種(上：*Dendrobium bigibbum*, 下：*Dendrobium hybrid*)。

新規収蔵資料紹介

植物画家・山田壽雄の描いた蘭

寺田鮎美¹・池田 博²

はじめに

2023年12月、美術書出版株式会社芸艸堂の顧問・本田正明氏より、山田壽雄作ラン科植物画58点が東京大学総合研究博物館に寄贈された(図1-4)。すべての図の枠線の右下には、「山田壽雄謹写」の印が押されている。また、各図に添えられた薄紙には、描かれたラン科植物の当時の学名や栽培品種名を記した文字が確認できる(図5)。これらの図は、今まで学術的にはその存在が知られてこなかったことから、研究上の価値が高い新出資料である。

山田壽雄とは

山田壽雄(1882-1941)は、福島県に生まれ、植物学者の牧野富太郎(1862-1957)に描画指導を受け、植物を専門に描くようになった(注1)。『牧野日本植物図鑑』(1940年)をはじめ、牧野の著作に載せるための原画を数多く手がけている。牧野は、自身で植物の精密な図を描き、その詳細な解説文を綴ることのできる稀有な植物学者であった。その牧野の要求に応じて植物を描くことのできる者と言えば、山田の植物画家としての優れた力量が窺い知れるであろう。

山田は、植物画家としての評判が高まるにつれ、牧野以外の植物学者の仕事も引き受けた。そのなかには、東京帝国大学理学部植物学教授の中井猛之進(1882-1952)による『大日本樹木誌』(1922年)や『朝鮮森林植物編』(1915-1939年)の原画制作、園芸家の石井勇義(1892-1953)によるツバキ・サザンカ図譜の原画制作等がある。この図譜はのちに東京大学理学部植物学科出身の植物学者・津山尚(1910-2000)編

による『石井勇義 ツバキ・サザンカ図譜』(1979年)として刊行されている。

山田壽雄と蘭

山田と蘭のつながりは、この津山編の著作内、山田の画業を綴った文章に見つけることができる。「別に東京科学博物館には山田の描いたアヤメなどの大形の彩色の掛図があった。この絵は晩年に李王殿下の目にとまり、その縁で、有名な李王家の蘭室のランの花が咲くごとに写生させてもらったという」(注2)。寄贈者の本田氏からも、山田作ラン科植物画は、李王家の蘭の図と伝わるものと伺っている。

新規収蔵資料のラン科植物画が、この記述に対応するものかどうかは、今後、本資料の調査・研究を進める上での一つの焦点となる。いずれにせよ、この山田作ラン科植物画が、質の高い精緻な表現に成ることは紛れもない事実であり、山田の画業における出色の仕事の一つとして、新たに位置づけられるべきだろう。

当館の山田壽雄植物画コレクション

東京大学総合研究博物館は、2017年冬にバックヤードから発見された、山田作の植物写生図、着色図367枚、単色図167枚の計534枚を所蔵する。これまでに、池田を中心に、その調査・研究を進めてきた(注3)。その結果、山田作の植物写生図のうち着色図の多くは、牧野の著作『牧野日本植物図鑑』、『図説 普通植物検索表』(1950年)、『原色 日本高山植物図鑑』(1953年)の図と構図が酷似しており、それらの原図を作成する際の下図あるいは参考図として用いられたものであることがわかった。

この研究成果を踏まえ、筆者らと、当館技術補佐員の清水晶子さん、東京大学大学院人文社会系研究科助教の蔵田愛子さんは、インターメディアテクにて、特別公開『東大植物学と植物画—牧野富太郎と山田壽雄』と題した展示を企画した(注4)。本展示シリーズでは、山田がどのように牧野と協働して植物画を制作したかという観点から、2020年から21年にかけて計3回にわたり、上述の山田作の植物写生図を紹介する展示を実施してきた。2023年には、シリーズ第4弾として、原図の作者として牧野と山田の二人の名が記された石版印刷図版(『大日本植物志』第1巻第4集、1911年)の展示も行った。

今回の山田作ラン科植物画の寄贈は、東京大学総合研究博物館の山田壽雄植物画コレクションの拡充に寄与するものである。今後、当館では、これまでの山田コレクションの研究や展示の実績の上に、新たに加わった本資料を含めて、山田コレクションのさらなる学術的活用を目指していくことになる。特に、山田の画業および明治後期から昭和初期にかけての日本における植物画制作状況のいっそうの解明、そして、新たな角度や多様な視点から山田の仕事の人々に紹介する展示企画の実現の可能性を開いていきたいと考えている。

おわりに

寄贈者の本田正明氏のご厚意により、このたび、当館の山田壽雄植物画コレクションの拡充と研究の発展の機会が与えられた。本田氏、ならびに、氏のもとにあった山田作ラン科植物画の情報を提供くださり、氏と当館を繋いでくださった

元NHK記者の大塚融氏に、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。

また、藏田愛子さんからは、戦前の洋蘭愛好に関する文献紹介等、今後の山田作ラン科植物画の調査に有益な助言を既にいただいている。練馬区立牧野記念庭園記念館学芸員の田中純子さんからも、李王家の蘭に関する文献情報をご提供いただいた。ブリティッシュ・コロンビア大学博士課程の菊池惟在さんには、本資料のリスト化のため、各図に印字された学名と現在の学名・栽培品種名の対照作業を担っていただいた。本資料の調査・

研究の進展のために、今後とも諸氏のご協力をぜひお願いしたい。

注1 「植物画家 山田壽雄の画業」、津山尚編・山田壽雄図『石井勇義 ツバキ・サザンカ図譜』1979年、誠文堂新光社、189-194頁。

注2 同上、191頁。

注3 池田博・田中純子「東京大学総合研究博物館のバックヤードから出てきた山田壽雄の植物図」『ウロボロス』24(3)、2020年、池田・田中・清水晶子『東京大学総合研究博物館所蔵 山田壽雄作植

物画(1)』東京大学総合研究博物館標本資料報告第122号、2020年、および、牧野図鑑刊行80年記念出版編集委員会『牧野植物図鑑原図集—牧野図鑑の成立』北隆館、2020年を参照。

注4 藏田愛子「東大植物学と植物画—牧野富太郎と山田壽雄」『ウロボロス』24(3)、2020年およびインターメディアテク・ウェブサイトを参照。



¹本館インターメディアテク寄付研究部門特任准教授／文化政策・博物館論、
²本館准教授／植物分類学)



図1 ミルトニア属の雑種 (*Miltonia* hybrid “Princess Mary” x *M.* “William Fitt”).



図2 [部分] オンシディウム属の一種 (*Oncidium* sp.).



図3 セッコク属3種 (左から*Dendrobium eq-uitans*, *D. miyakei*, *D. linawianum*).

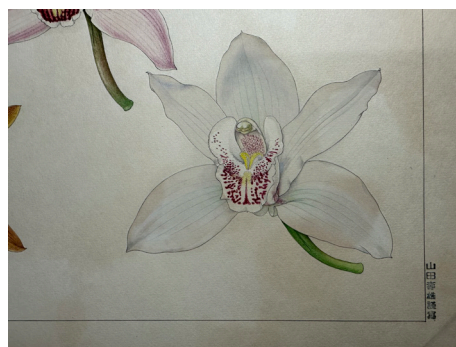


図4 [部分] シュンラン属の一種 (*Cymbidium* Dorchester).

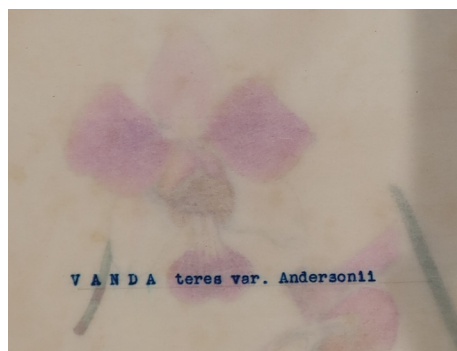


図5 当時の学名・栽培品種名が薄紙にタイプされている。

2023年度 学芸員専修コース

サイエンス & アート：植物標本と植物画

池田 博¹・寺田鮎美²

はじめに

2023年度「学芸員専修コース」が、2023年11月13日より17日にかけて実施されました。この「学芸員専修コース」は、「国内の博物館や、それに類する施設で働く専門職員を主な対象とするもので、大学等の高等研究機関で生まれる新しい研究成果を広く紹介し、それをもって自然史・文化史の枠を越えた、文字通り博物学的な「博物館学」を、博物館資料の収集や管理、資料活用や展示設計に関わる「実践的な知」と併せて習得させる専門的リカレント教育の場として企図されています」（総合研究博物館HPより）。残念ながらコロナ感染症の拡大の影響で、2019年より2022年までの4年間は開催できませんでしたが、2023年度より再開されました。

今回のテーマは、『サイエンス & アート：植物標本と植物画』としました。自然史系の学問にとって、標本は一次資料としてなくてはならないものです。植物学の分野でも、研究のための標本が世界中で集められ、蓄積されてきました。東京大学（東京大学植物標本室：TI）でも、1877年の大学創設以来、継続的な収集活動が続けられ、研究・教育・展示活動に利用されています。通常の植物標本（おし葉標本）は新聞紙に挟んで上から重しをかけることにより作成され、平面的でコンパクトにできることから、収集や取り扱いが容易になるという利点があります。しかしその反面、おし葉標本は生時の色をとどめることが難しく、また標本を作製する過程で三次元の構造が変形してしまう欠点がありました。その欠点を補うために、生時の色や形を再現し記録することを目的として植物画が

描かれてきました。すなわち、「科学における植物画」には正確な再現性が求められます。一方、植物は形が多様で多彩なことから、絵画のモチーフとして用いられることも多く、「アートとしての植物画」も制作されてきました。したがって、博物学的観点として優れた植物画とは、科学的再現性と芸術性を兼ね備えたものと言えます。

TIには、190万点を超える膨大なおし葉標本が収蔵されるとともに、明治期から大正時代にかけて理学部植物学教室の画工により描かれてきた植物画、『牧野日本植物図鑑』（1940）の元絵となった山田壽雄の植物画、中島睦子氏が描いた『日本ラン科植物図譜』（2012）の原画、昭和から平成にかけて理科の教科書や図鑑の挿絵を数多く描いてきた天木茂晴氏の原画など、数多くの植物画が収蔵されています。今回の学芸員専修コースでは、そのようなおし葉標本と植物画とを有機的に結びつけた新たな博物館展示を、受

講生の皆さんと一緒に考えてみたいと思いました。いつもは「地味」な植物関係の展示を、サイエンス&アートの力で訴求力のある展示にすることができたでしょうか？

受講者

受講者については、博物館のホームページで募集をかけ、以下の10名が選考されました（敬称略）。陣内裕美（佐賀県立博物館・美術館）、鈴木伸哉（東京都埋蔵文化センター）、小林光一郎（横浜市歴史博物館）、水谷穂波（浜松科学館）、下國由貴（株式会社 乃村工藝社）、林 宏美（リゾートトラスト株式会社）、福井 萌（東京大学地震研究所）、長谷川佳代（岐阜県立大垣北高等学校）、平野晴野（東京海洋大学ミュージアム機構）、大坪 奏（神奈川県立生命の星・地球博物館）。また、以下の博物館内の若手研究者3名も、展示公開のスキルを身につけるために受講しました。金崎由布子（ア



図1 実習風景。

ンデス考古学)、三木健裕(西アジア考古学)、和田英敏(魚類分類学・生物地理学)。参加した受講生はさまざまな専門性を持ち、文系・理系を問わずにバラエティ豊かな人たちが集まりました。

コース概要

コースは5日間実施されました。初日と2日目の午前中は座学による講義とバックヤード研修がありました。講義は以下のタイトルと講師陣によりおこなわれました。『博物館計画総論』(松本文夫・総合研究博物館/建築学)、『ハーバリウムの機能と役割』(池田)、『歴史的植物画とそのアーカイブ化』(蔵田愛子・東京大学大学院人文社会系研究科/文化資源学)、『植物画を用いた公開展示および植物画制作の実際』(寺田・山中麻須美/植物画家)、『博物館デザイン表現』(関岡裕之・総合研究博物館/博物館デザイン)。今回は植物標本と植物画を題材とした展示計画を立てることとしたので、博物館計画や博物館デザインの講義に加え、植物標本室(ハーバリウム)の概説や植物画の歴史、植物標本と植物画の具体的な展示事例を紹介したほか、実際に植物画を描いている画家の方に来ていただいて植物画の制作風景を見てもらったりしました(図1)。また、博物館の収蔵状況を感じてもらうために、バックヤード研修として、鉱物分野(三河内 岳/惑星物質科学・鉱物学)、昆虫分野(矢後勝也/昆虫自然史学・保全生物学)、古生物分野(佐々木猛則/動物分類学・古生物学)、および植物分野(池田)の収蔵庫の見学をしました。

2日目の午後から最終日にかけては、今回のテーマに沿って、展示のコンセプトと実施計画を考えてもらいました。これまでは、実際に展示までセッティングすることもありましたが、今回は展示をする場所がない(東京大学大学院理学系研究科附属植物園(通称:小石川植物園)にある小石川分館が耐震工事のために閉鎖中)ことと、コンセプトと展示計画の

時間を十分にとるために、実際の展示はせず、バーチャルな展示を考えてもらうこととしました。そのため、今回は3チームに分かれ、それぞれの班でタイトル、コンセプト、展示物等を考えてもらい、空想の展示空間(約100 m²)に展示するイメージを作り上げていきました。2日目からは1日の終わりに各班で進捗状況を報告し、講師陣で時間がある人に意見やアドバイスをしてもらいました。そして最終日の午後4時からは館長を含めた発表会を開催し、その成果が披露されました。以下、それぞれのチームによる展示タイトルと概要を記します。

1. イチョウグループ(陣内・平野・三木・長谷川)(図2・3)



図2 イチョウグループポスター。



図3 イチョウグループ模型。

『衣植住(いしょくじゅう)』: 植物に関する衣と住に関する展示とし、人間が身近な植物をいかに利用してきたかを、染料植物を通して解説をする。展示構成は、植物画と植物標本を比較して見せ、時間経過による植物標本の色の変化に注目させる工夫をおこなった。展示場の全形をイチョウの葉の形にしたことから、グループ名を通称「イチョウグループ」とした。

2. スミレ組(下國・鈴木・福井・和田)(図4・5)

『Real Life - すみれ巡礼の旅』: 多様な環境に生育するスミレ科植物の共通性、多様性、その実態を、標本と植物画を使って紹介する。展示場をスミレの花の形に



図4 スミレ組ポスター。



図5 スミレ組模型。

Ouroboros

横し、来訪者は花の正面から入場し、様々な環境ごとに生育するスマレを鑑賞しながら、最終的には花の後ろ側の距（きょ）の部分から退場する。人々が実際のスマレに触れて憩うことができるように、屋上を広場として活用する。

3. 表裏グループ（小林・水谷・林・大坪・金崎）（図6・7）

『表裏 - 植物標本と植物画 -』：植物画は植物標本の収集とともに長い歴史を持つ。植物標本と植物画とは一種の表裏一体の関係にある。展示台の両面に植物標本と植物画を置き、室内に基盤の目状に配置させる。来訪者は、鑑賞する方向により、植物標本だけが見える、植物画だけが見える、植物標本と植物画の両方が見える、といった、一種のトリック的な

展示を楽しむことができる。

それぞれの発表の後には、発表会参加者から意見や感想が述べられました。全ての発表が終了後、館長より修了証書が授与され、コースは終了しました（図8）。

コロナの影響により、5年ぶりの開催となった学芸員専修コースでした。担当教員も久しぶりということもあり、手探り状態で準備をする場面もありましたが、受講者の皆さんは非常に熱心に取り組み、「サイエンス & アート」という漠然としたお題に一生懸命に取り組んでいただきました。今回はバーチャルな展示ということで、実際の展示作業をすることはありませんでしたが、逆に展示空間の制約もないことから、自由な発想で

展示を作り上げることができたのではないかと思います。講師陣の皆様、バックヤードツアーを案内して下さった先生方、ありがとうございます。特に松本先生と関岡先生には、模型の作製法や、その日の最後の進捗状況の発表会にも毎回参加していただき、貴重な意見やアイデアをいただき、感謝致します。

最後に、このコースに参加した人がそれぞれの職場に帰り、今後の展示教育活動に今回の経験が活かされた、とっていただけることがあれば幸いです。



¹本館准教授／植物分類学

²本館インターメディアテク寄付研究部門特任准教授／文化政策、博物館論



図6 表裏グループ ポスター。



図8 集合写真。

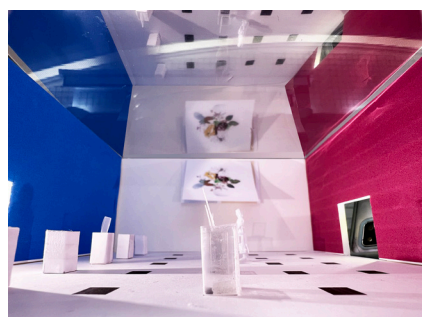


図7 表裏グループ 模型。

新規収蔵

蝶を追い求めてアジアの山々へ

原田基弘

私が蝶の魅力に惹かれたきっかけとなったのはすぐ隣りに住む医大生であった早野育男さんとの出会いだった。戦後間もない昭和25～26年、小学校に通う子供の頃である。家の周りはまだ緑豊かな丘陵に囲まれた田園地帯で夜になればたくさんの蛍が見られた。

早野さんは時折蝶を捕まえて来ては手づくりの飼育箱に草や木の葉を入れて蝶に卵を産ませていた。あるとき、近くの公園でキタテハのメスを捕まえてきた。そして4枚の翅を半分程切り落として飛ばないようにした。シャーレに水を張り、平たい素焼きの植木鉢を乗せ、中に食草のカナムグラの枝葉を数本水に差し、翅を失ったメスを放り込んでスリガラスの蓋を被せた。1時間ほど経過してそのガラスの蓋を開けると、葉の表面にはいくつもの緑色の卵が産み付けられていた。これはリシャル式採卵法と呼ばれる人工的な強制採卵の方法である。あとで知ったのだが、当時ヨーロッパのリシャルという学者による蝶の強制採卵の方法として考案されたものが日本に紹

介されたものである。

戦後の世の中も平和に落ち着き、アマチュアの蝶のコレクターや研究者があちこちに現れたのもこの頃であった。そしてそれぞれ同じ趣味を持つ仲間同志の交流が始まり、互いの研究材料や知識と経験の交換が始まった。特に豊富な知識と経験を持ったこの世界の頂点の一人であった磐瀬太郎先生のもとには多くの蝶仲間(図1)が集まり、情報交換の場になっていたようだ。

早野育男さんもその一人だった。学生服姿の高倉忠博さんや葛谷健さん(図1)らが横浜の早野さん宅に遊びに来られて虫の話を楽しんでいたのをしばしば目撃した。また、鹿児島島の志布志高校の三羽鳥と言われた福田晴夫さん、新川勉さん、中尾景吉さん(図1)からは、越冬後のイシガキチョウやクロノマチョウのメスなどが早野さんに送られて来て、まだ私の手の届かぬ異国の蝶の採卵や飼育をみては羨ましく思ったものだった。

時に早野さんに誘われてネットを持って近くの野山にお供することは大きな楽

しみであった。水田地帯に続く雑木林では、ハンノキからミドリシジミやクヌギの枝からミズイロオナガの卵を探すことも早野さんから教わった。ある時はクヌギの低い枝先にウラナミアカシジミが産卵するのを見つけて暫く観察し、珍しい情景に大きな衝撃を受けた。

中学に入ると、少し足を延ばして一人で野山を駆けめぐる日が続いた。夏休みに入ったある日、いつもの神社のある森に向かった。ここはアゲハ類やオオムラサキなどが飛来する大好きな場所だった。するとその境内には珍しく大きな白い網を持った大人がいて黒いアゲハを仕留めた。恐る恐る近寄りながら緊張して頭を下げ「原田といいます・・・」「五十嵐です」と自己紹介をした。五十嵐邁さん(図2)はまだ東京から引っ越して来たばかりで家がすぐ近くだった。私はこれまでに採集した蝶や幼虫について夢中で話し、近くの雑木林に案内した。五十嵐さんは大人で大きな年の差はあったがすっかり意気投合した。

帰りには五十嵐さんのお宅にお邪魔し



図1 磐瀬太郎先生門下の諸氏(神田の学士会館にて、2009年3月29日撮影)。左下から葛谷健さん、早野育男さん、福田晴夫さん、新川勉さん、左上から三原実さん、平賀壯太さん、布施英明さん、原田(筆者)、中尾景吉さん。右上の丸囲みは養老孟司さん。



図2 五十嵐邁さん。

Ouroboros

て鹿児島県の佐多岬で採ったという大きなツマベニチョウや北アルプスの常念岳のタカネヒカゲなどを見て感激し、うらやましく思った。それからは五十嵐さんのご都合を伺って度々お宅にお邪魔をし、蝶の話に時の経つのを忘れた。アゲハチョウの仲間が特にお気に入りのようだった。また遠い異国の珍蝶やそれらの幼虫や蛹の話聞き、これまでの身近に見てきた横浜の虫の世界から一気に視野が広がった。

高校生になって初めての夏休みには、予てからネットインを夢見た高山蝶のタカネヒカゲを狙って常念岳に登った。頂上の山小屋に数日間滞在し、目的を果たすことが出来たのは嬉しい思い出である。この山小屋に滞在中に地元の松本市からやって来られた同じ目的のムシ屋がいた。高校生の塚田悦造さんである。帰京後に交流が始まり、しばらく文通と標本や飼育材料の交換が続いた。20数年を経て偶然東京で会うと彼は偉大な蝶のコレクターになっていた。

高校生活が最後の夏には大雪山に登ってウスバキチョウとダイセツタカネヒカゲ、アサヒヒョウモンなどを採集したり、その幼虫や卵を見つけたりして大満足であった。

五十嵐さんは若い頃から絵を書くのが得意だったようで、油彩の風景画や蝶の水彩画を見せてもらった。いずれも素晴らしい迫力ある絵であり、私も高校時代には美術部で過ごしたが、とても及ばなかった。

早野邸や五十嵐邸を相変わらず訪ねて



図3 林慶先生。

は多くの知識を得た。また、日新書院から出版された「日本蝶類解説」の著者である林慶先生(図3)を訪ねたのもこの頃で、実際の飼育や交配の技術などを教わったり、また林邸に出入りする多くの先輩諸氏に出会ったりしたことも楽しい思い出である。

1962年秋の紅葉の便りを聞く頃、青森の室谷洋司さんが京都の杉峠で見つけた奇妙なゼフィルスの卵を林先生の所に持ち込んだ。キンキマメザクラから得たメスアカミドリシジミに似たやや小型の汚れた卵だった。当時、ゼフではヒサマツミドリシジミだけがまだ生活史が解らず、その生活史の発見者に懸賞金一万円が掛かっていた。この突然のニュースはゼフ好きな仲間たちに伝わり、直ぐに多くの仲間たちが林邸に集まり、夜遅くまで色々な意見を述べ合い、皆が興奮した。

当時、京都の杉峠はヒサマツミドリの産地として知られていた。たちまち多くの有志が杉峠に集合し、一斉に探索を始めてキンキマメザクラから問題の卵を皆がそれぞれ見つけて東京に持ち帰った。期待に胸を膨らませながら翌年春の羽化を待った。しかし残念ながら結果は全てがただのメスアカミドリシジミだった。卵の突起部分が欠けて全体が小さく見えたのが、異常に見えた原因だったようだ。

この騒ぎの結果を待たずして林先生は長い療養生活の末旅立たれてしまった。磐瀬先生の蝶に関する豊富な知識と林先生の永年の経験は我々にとって大きな目標と指針になった。

翌1963年、とてつもなく大きな計画が持ち上がった。ネパールヒマラヤに蝶と蛾の日本との関連を探索調査するというプロジェクトであった。これは五十嵐さんのアゲハチョウ研究と藤岡さんの日本産蝶類の発生源を探ることが主目的で両氏により計画されたものだった。同じ鱗翅目の蛾類も含めて調査することで日本鱗翅学会が後押しし、朝日新聞社が

これを後援した。

時期はヒマラヤの温帯圏の春が始まる6月頃から8月にかけての3ヶ月。調査の地域はネパールの首都カトマンズ周辺と世界第三峰のカンチェジュンガの山麓から山腹。隊員は山岳登山の経験豊富で蛾類研究者の春田俊郎氏を隊長に、五十嵐邁、藤岡知夫、阿江茂、原章の諸氏と私の6名で構成された。当時はまだ海外旅行が困難な時代で虫の採集目的で外国に行くことは夢のような計画だった。

五十嵐さんはアゲハチョウの分類上において特異な存在と位置にあるテングアゲハに注目し、これを第一の目標とした。古い記録によればイギリスの探検家がインド北部のSinchal Hill(現Darjeeling Tiger Hill)で秋に路上を歩く幼虫を拾い、本国に持ち帰ったところ鋭い突起を持った蛹になり、翌春テングアゲハが羽化したという。これはテングアゲハの幼生期を探り出す唯一の手がかりであった。また、藤岡さんはFrederic M. Baileyの書いたネパールの蝶類リストを参考資料とし、我々もこれらの記録を読んで出発を待った。

1963年5月1日、隊長の春田さんを除いて5人の隊員が羽田からカルカッタに向かって飛び立つ。隊長の春田さんは長期にわたるキャラバン生活に必要な登山用具、食糧、採集用具を船便で受け取る手配や手続きで先にインドに向かっていた。台湾、香港、バンコックを経由し、約10時間を経てカルカッタに着いた。エアコンのない石作りの古いホテルで天井からは扇風機が大きな音を立てていた。

ネパール入国の事務的手続きなどの準備で一週間を費やして、6月8日にカトマンズに到着。カトマンズはヒマラヤ山脈を後ろに控え、標高1,400mほどで涼しく快適で、インドとは雲泥の差だった。我々はここで長いキャラバンの旅に出る準備で入山手続きやシェルパとポーターの手配、食料の買い付けなど雑事に追わ

れたが、合間にはジープを飛ばしてカトマンズ市郊外の山地にあるPulchoki山の麓のGodavariに行った。そこは好採集地でタカネクジャクアゲハ、キシタアゲハ、ウスイロジャコウアゲハやゼフィルス、各種タテハ類など多くの種が現れ、幸先の良いスタートであった。そこで驚いたことは、村の集落周辺の畑にはキアゲハの幼虫がミカンの木で発生していたことだ。

さて、テングアゲハが多く山頂に飛来するというMahadeopokhari山は、行ってみると樹木は伐採され、草原のようなハゲ山に変化していて、*Aporia* (ミヤマシロチョウ属)と*Colias fieldii* (フィールドモンキチョウ)しか見られなかった。この大きな環境の変化は五十嵐さんにとっても大きなショックであった。五十嵐さんは仕事の都合で東部ネパールへのキャラバンは参加せず、残す一週間をカトマンズに残ってテングアゲハの探索に費やした。

我々のキャラバンの準備は出来たが雨季入りで飛行機が飛ばず、ネパール東端のピラトナガールに向かったのは1週間後。このインド平原の端がキャラバンのスタート地点。2ヶ月という長期採集旅行は誰も初めてで、期待と不安があった。

低標高の暑い熱帯から標高4,500mのカンチェンジュンガの高地まで、谷から山の尾根へと登っては下るといった毎日を繰り返しながら、少しずつ標高を上げていった。低地のツマベニチョウやカバマダラから始まり、黒いアゲハ類、樹林のゼフィルス、草原のシジミ類、そして高原のタカネヒカゲやモンキチョウとパルナシウスへと、環境の変化で蝶相や他の昆虫と植物の様子が日々違って興味は尽きなかった。目的のテングアゲハはキャラバン歩行中、標高2,000mほどの谷あいで吸水する唯一の個体を発見したが、捕獲することはできなかった。

我々は2ヶ月にわたる長期の採集と調査を終えて8月下旬に蝶、蛾、甲虫、セミ、トンボなど、多くの標本や写真によ

る貴重な資料とともに無事帰国の途に着いた。これらは新種、新記録などを含めて後に日本鱗翅学会特別報告として発表された。

ヒマラヤへの長期間の採集の旅は、私にとって有意義で貴重な経験となつて、国内はもとよりアジア各地の蝶への興味とその幼生期や生態に一層関心が深まった。1929年Joicey and Talbotにより記載された日本産ナミアゲハの近似種*Papilio benguetanus* (ベンゲットアゲハ)を狙って1965年3月にフィリピンのルソン島行きを計画した。古い記録を頼りにバギオ市の北方サントトーマス山を目指し、頂上に飛来した目的の*P. benguetanus*の♂を捕らえることが出来た。30数年ぶりの記録かも知れない。

そしてその日の午後、さらに同じ場所に飛来した黒いアゲハをネットインした。左翅の尾状突起が大きく破損した飛び古した個体ではあったが、明るい緑の帯が美しく輝いた、これまでに図鑑では見たことのないカラスアゲハの仲間だった。直感的に新種のような気がしてしばらくは興奮で震えた。帰国後、五十嵐邁さんにより*Papilio chikae* (ルソンカラスアゲハ)として新種記載された。

五十嵐さんは時間の許す限りテングアゲハの生活史を追い続けてネパール、インドのダーズリンに探索を続け、私も常に同行させて戴き、協力を惜しまなかった。そして24年間の長い歳月をかけ、多くの協力者のもとダーズリンでついにテングアゲハ生活史の解明にピリオドを打った。続いて1986年9月には五十嵐さんとともに未知のシボリアゲハの生活史も解明することが出来た。このようにしてヒマラヤを始め、アジア各地に長期にわたる幼生期の探索の旅は終わることはなかった。

2011年8月には、ブータン政府の許可を得て日本蝶類学会の矢後勝也、渡辺康之、山口就平、青木俊明、五十嵐昌子の諸氏と筆者に加え、ブータン政府職員、NHK関係者らによってブータン東

部にブータンシボリアゲハの調査を行った。ヒマラヤの東端部に位置する狭い国土のブータンに大型の極めて酷似する2種のシボリアゲハを産することについては、五十嵐さんをはじめ多くの研究者やマニアの間で謎のアゲハとして知られていた。僅かに知られた情報で生息地は中国との国境付近の未開な入域が困難な場所であるということだった。

この探査調査のきっかけとなったのは、2009年にブータン政府の森林局役人によって約80年ぶりに本種と思われる種が撮影されたことが同地を訪れたイタリア人研究者の目に触れ、その情報が日本にもたらされたことだった。NHKの報道記者で蝶類研究者でもある斎藤基樹さんが早速同地に飛び、ブータン政府に接触して同国との共同調査とその報道を提案したのである。

1933年にイギリスの探検家Frank Ludlowが発見・採集した記録を頼りに、8月初旬にTrashiyangtse (標高約2,000m)を目指した。国境に続く谷沿いの道は明るく拓けていて、想像していたよりも歩きやすかった。予定していた一週間の調査地滞在も連日好天に恵まれ、ブータンシボリアゲハの再発見だけに留まらず、偶然にも食草のウマノスズクサに産卵する母蝶も確認し、この調査は大成功に終わった。

この後も未知の蝶類の生態や幼生期の探索はしばらく続いたが、現在は社会背景にコロナの流行という不幸な出来事で休眠を余儀なくされている。それでも今回、150ケース約12,000個体の標本を東京大学総合研究博物館に収納できたことは幸甚である。これらの標本には蝶を追い求めた私の軌跡が深く刻み込まれている。

尚、寄贈に際してこれまで大変にお世話になった先輩諸氏、友人ならびに矢後勝也博士に深謝の意を表したい。



(本館研究事業協力者・

日本蝶類学会名誉会員／昆虫生態学)

研究紹介

鎌倉時代人の再発掘—古人骨のキュレーション—

近藤 修

はじめに

人類先史部門では、発掘等で出土した古人骨と土器や石器などの先史遺物を保管している。部門の運営は博物館教授の海部さんと共同で行いつつ、私自身は形質人類学者として、古人骨コレクションの管理・運営を続けてきた。ちょうど今年の1月中旬に、ウクライナ研究者3名が、人類先史部門の標本管理を視察に訪れ、その際に、全般的な標本管理状況を紹介したところである。今回、その時の様子と、現在進行中の古人骨キュレーション活動として、鎌倉市材木座遺跡出土人骨について紹介する。

ウクライナでの先史・人類学の現状

2024年の1月中旬に文化庁、奈文研、東文研の招待で、ウクライナより研究者が3名（Lyudmila Myronenko 考古学、Oleksandru Kozak 形質人類学、Inna Potehina 形質人類学）来日された。主な目的は、戦災から標本をいかに守るか、復興するかということで、日本での東日本大震災からの博物館標本

の復興活動などとの情報交換ということであった。1月15日には、東文研で「How Archaeological Heritage can be better Protected from the Effects of War in Ukraine」というシンポジウムが行われ、16日に東大の総合研究博物館を訪問された（図1）。

ウクライナでの現状は、侵略・占領地域の博物館標本は目も当てられないものであるが、キーウを中心とした場所には、まだ多くの考古資料・古人骨標本が保管されている。不十分な予算と人的資源の中、また、終わりの見えない戦争のなかでも、未来に向けての活動を続けていきたいという思いを共有した。

博物館では、特別展「骨が語る人の生と死」、常設展を案内し、人類先史部門の収蔵庫では、とくに先史標本、古人骨の保存・修復方法などを紹介した。4Fの人類収蔵庫では、ちょうど鎌倉材木座頭骨の修復作業中であったので、中世日本の政治の中心地であった鎌倉と、集団墓地遺跡について話が及ぶこととなった。

材木座遺跡と中世集団墓地

鎌倉市は、南を海に、それ以外の三方を山に囲まれた自然の要塞であり、鎌倉時代にはそこに都が置かれた。当時の海岸段丘は、墓所、あるいは遺体の集積所として使われたようであり、現在の由比ガ浜から材木座のあたりからは、発掘調査によりおびただしい数の人骨が出土しており「中世集団墓地」として知られている。材木座遺跡とその人骨資料はこれら中世鎌倉遺跡調査の端緒を築いた標本である。

東京大学理学部人類学教室が主体となり、昭和28年(1953年)に第1次、第2次、昭和31年(1956年)に第3次発掘が、鎌倉材木座（現 鎌倉簡易裁判所）にて行われた。大小さまざまな32群の人骨集中区より、総数910体以上の人骨が収集されている（図2）。全身骨格またはそれに近いものは少なく（約30体）、大部分の人骨は遊離した頭骨と四肢骨が2次的に埋納されたものである。出土した陶片、古銭より鎌倉時代を中心とした遺跡と考えられ、大量の人骨は当時の合戦



図1 博物館視察風景。ウクライナ研究者は右写真後列の3名。前列は奈文研のホスト3名。



図2 材木座人骨の出土状態。16群は主にヒトの頭骨を集めたものとみられる。



図3 発掘時に用いられたと思われる紙袋と整理作業の様子。



図4 博物館の常設展示に収められた、材木座遺跡人骨。

(1333年の新田義貞の鎌倉攻め)による戦死者を片付けたものと考えられてきた。

1次・2次発掘資料については、人骨の刀キズや頭骨の形質(長頭傾向)に

ついての詳細な報告がある(鈴木尚、1956年)。頭骨をもとにした性別および年齢構成は、男性が多く、次に女性、幼若年が最も少なく、ほぼ6:3:1の比であ

る。年齢については、成年が多く(75.4%)、次いで熟年(13.2%)、老年はわずか(0.4%)である。

刀キズは頭骨を中心に観察されており、深い創(斬創、切創)より浅い創(搔創)が多く、8割以上を占める。この搔創について鈴木は当初より刀キズと考えたが、直接の合戦時のみならず、頭部の軟部組織を剥ぎ取った際にできた可能性も指摘していた。すなわち、戦闘による損傷ではなく、武功の証としての首狩り、あるいはある迷信に基づく、たとえば悪病の治療のために戦死者から無差別に軟部を剥ぎ取ったものも含まれるのではないかと考えた。

近年、周辺の同時期の集団墓地遺跡の調査が進み、人骨の性、年齢構成や、受傷のパターンに違いがあることがわかり、材木座遺跡出土の人骨の「刀キズ」が注目されることとなる。同時期の周辺の墓地遺跡出土の頭骨にくらべ、材木座頭骨には特異的に「搔創」が多く見られることが明らかとなり、当時の調査と材木座頭骨の再評価が必要とされてきた。

材木座人骨の再発掘

実は、材木座遺跡からはあまりに大量の人骨が出土したため、鈴木の研究対象は3回の発掘のうちの前2回、第1次・第2次発掘による出土人骨にとどまっていた。頭骨の観察は選ばれた283頭蓋に対して行われ、既述の結果を報告している。すなわち第3次調査で出土した、少なくとも354体とカウントされた頭骨、四肢骨は未調査であり、理学部2号館の地下、空堀のプレハブ小屋に、ほぼ発掘当初の袋詰めのまま、長年、手つかずの状態でも保管されてきた(図3)。これに手を付けようとする作業を始めたのが2015年であった。当初プレハブには、200箱以上の木製トレイが納められていた。箱の中には発掘時に使用したと思われる油紙性の紙袋に入骨が入っており、紙袋には、数字や記号、時には日付が記入されていた。袋が破れてしまっていたり、木製ト

Ouroboros

レイが朽ちていたりすることもあり、まずは長年蓄積したホコリを取り払い、復元可能な情報を整理する必要があった。

2015年からボランティア学生やアルバイトを使って少しずつ清掃と再整理、袋詰めと箱詰めをおこない、初期インベントリーを完了したのが2017年。その途中、2016年の博物館常設展示リニューアルに伴い、研究展示棚の一部を利用させていただき、長年2号館地下に眠っていた材木座人骨は、博物館に移動することが可能となった(図4)。

材木座人骨の再研究

この材木座頭骨標本を使って、研究をすすめているのは、英国からやってきたキャサリン・ハンプソンさんである。日本文化、とくに中世武士に興味をもって、彼女が、英国では、文献研究を行ったが、日本では実物研究がしたいということで、材木座人骨を紹介し、現在までこれに果敢に取り組んでいる。

これまでに、頭骨の復元と観察を先行しておこない、第3次調査の頭骨と、第1次・2次調査の頭骨を加え、293頭骨について、鈴木が「刀キズ」とした外傷を観察した。とくにそのキズのうち多く

を占めていた「搔創」について、肉眼と拡大鏡による観察に加え、SEMを使い30倍から100倍まで詳細観察をおこなった。

その結果、材木座頭骨にみられた「搔創」と分類されたキズの多くは、死の前後のヒトによる「刀キズ」ではなく、弱くかすかなキズである。これらは、現在のタフォノミー研究の範疇では、砂などの堆積物との摩擦(トランプリング)によってつけられたものであると判定した。このキズは頭骨の様々な部位にランダムにおこり、時々平行な線状の束として見られるが、その場合もそれぞれの線の長さや深さが異なり、多くの場合表面の別なキズと交差している。すなわちこれらの「浅い」キズは戦争などの暴力に直接的に関連したものではなく、他の要因、例えば、死後の遺体処理、あるいは死後の一定期間屍体を放置した風習によるものである可能性が高い。

文献による歴史研究によると、中世鎌倉では病人や病弱者が川や道路に捨てられたり、死体が単に捨てられたりした風習があり、「屍体放置」として知られている。これは、有名な「餓鬼草子」絵巻に描かれている風景とも一致する。さら

に、最近の発掘からも、材木座遺跡の近隣に位置する由比ヶ浜南遺跡では、この「屍体放置」習慣を示す証拠として、人骨と動物骨の混合集骨が見つかった。

1950年代に発掘された材木座遺跡頭骨の再調査(再発掘)によって、一つの疑問点が解決された。同時に、過去のヒトの行動(闘争、暴力、埋葬習慣など)を古人骨標本より読み解く難しさも、再認識する結果となった。いずれにせよ、眠っていた材木座人骨は、なんとか研究に活用可能な段階にたどりつつあり、やっと70年以上たって日の目を見る準備が整ったといえるのかもしれない。

参考文献

鈴木尚(代表) 1956. 鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨. 日本人類学会編 岩波書店.

Hampson K, Kondo O 2023. Taphonomic analysis of 'scratches' on medieval human crania from the Zaimokuza site, Kamakura, Japan. *Anthropological Science*, 131: 69-78.



(理学系研究科生物科学専攻准教授/
古人類学・形態人類学)

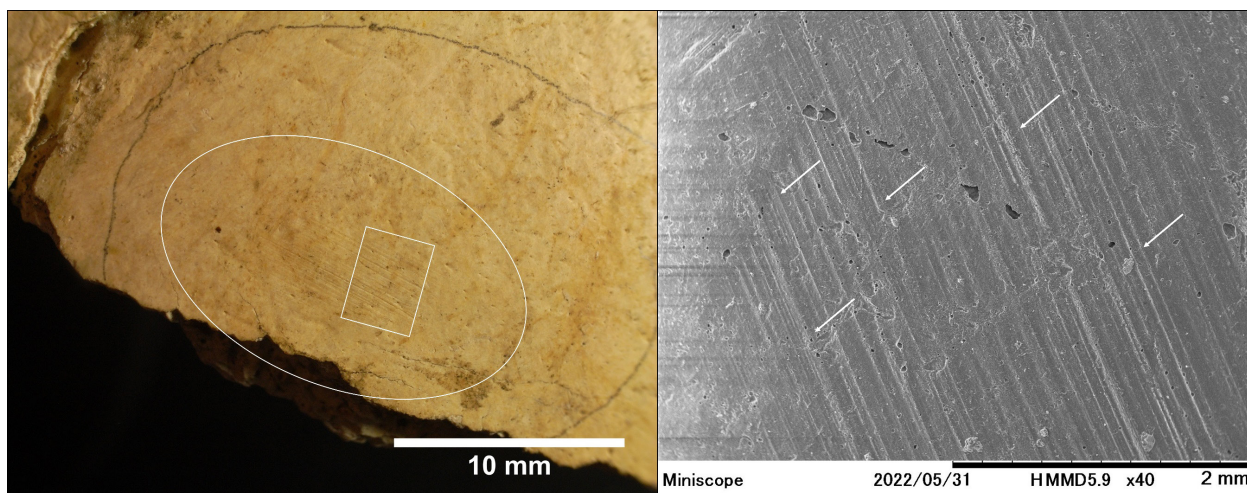


図5 「搔創」と分類されたキズは、並行する複数の直線からなる場合であっても、始点と終点が異なり、長さの違うキズの塊であり、これはトランプリングによるキズと判断される。

ホームカミングデー

標本から過去を知るハンズオンギャラリー

金崎由布子¹・三木健裕²・和田英敏³・尾寄大真⁴

東京大学では、ホームカミングデーという、本学卒業生やその家族などを対象とした公開イベントを毎年10月に実施しており、2023年度は10月21日に開催された。総合研究博物館では、2023年度ホームカミングデーの企画として、和田英敏（魚類分類学）、金崎由布子（アンデス考古学）、三木健裕（西アジア考古学）、尾寄大真（年代学）の4名によるハンズオン展示のイベントを行った。本年度はコロナ対策として昨年度設けていた入場制限を撤廃し、自由入場とした。当日の来館者数は約500人と盛況であった。また、当日は3名のボランティアの協力を得た。

1階の展示スペースでは、和田英敏による「絶滅した魚類の標本から当時の環境を知る」の展示が行われた。日本の汽水・淡水魚類はこれまでにおよそ500種が知られているが、過去100年の間にその健全な生息環境が失われ絶滅したとみられる種も多くいる。この展示では、総合研究博物館に収蔵されている絶滅種のハンズオン展示をつうじて、来館者にかつての自然の有り様と人間活動による変化を直に体感してもらった（図1）。

また、1階の放射性炭素年代測定室では、尾寄大真による「年代を測る加速器質量分析計（Accelerator Mass Spectrometry）」の解説ツアーが行われた。加速器質量分析計は極めて少ない量の同位体を測定するための装置であり、資料中の放射性同位体・炭素14を測定することで、資料がどれくらい古いものであるか知ることができる。本展示では、普段はガラス越しにしか見ることのできない加速器質量分析計の実物を、来館者に間近に体感してもらった（図2）。

2階の展示スペースでは、金崎由布子

による「土器から読み解くアンデスの古代」の展示が行われた。古代アンデス文明では、生き物のかたちを模したのものや、戦いの場面を描いたものなど、様々なユニークな土器がつくられた。この展示では、当館に所蔵されているアンデスの土器に実際に触れてもらうことで、古代の人々の暮らしを体感してもらった（図3）。

また、隣のスペースでは、三木健裕による「彩文土器から探る西アジア都市形成期の地域性」の展示が行われた。約7000年前の西アジア一帯では、黒色の文様が描かれた彩文土器が広くみられる。時代が下り、社会が複雑化し、都市化が進行していく過程で、土器の地域性が顕著になる。本展示では、シリア、イ

ラク、イランから発掘された彩文土器のハンズオン展示を通じて、この地域性を来館者に体感してもらった（図4）。

また、これらの展示に加え、当日は1階特別展示室にて本館特別展示『骨が語る人の「生と死」 日本列島一万年の記録より』が開催中であった。特別展示では、大学院生による展示解説が行われ、多くの来館者が訪れていた。



¹本館助教／アンデス考古学

²本館特任助教／西アジア考古学

³本館特任助教／魚類学

⁴本館特任研究員／年代学・宇宙地球化学



図1 展示の様子①（「絶滅した魚類の標本から当時の環境を知る」）。



図2 展示の様子②（「年代を測る加速器質量分析計(Accelerator Mass Spectrometry)」）。



図3 展示の様子③（「土器から読み解くアンデスの古代」）。



図4 展示の様子④（「彩文土器から探る西アジア都市形成期の地域性」）。

研究紹介

なぜ子どもが減るのか？

小西祥子

先日、韓国の2023年の合計出生率が0.72になったというニュースが驚きをもって伝えられました¹。同じく少子化が社会問題とされる日本でも2022年の合計出生率は1.26、中国でも1.09ですから韓国の合計出生率の低さは際立っています。日本など死亡率が十分に低い国でも、人口を減らさないためには合計出生率が2.06よりも高い必要がありますから、現在の状況が継続すれば、よほど大規模な人口流入がない限り、人口が減少していくことになります。話が前後しますが、合計出生率というのはある年の15歳から49歳までの女性人口と各年齢の女性が生んだ子ども数から計算する指標で、生み方の年齢パターンが経時的に変わらないという仮定をおけば、「女性が生涯に生む子ども数」の指標となります。実際は多くの国において、女性が結婚したり子どもを生んだりする年齢が時代によって変化しますから、合計出生率は必ずしもその国の女性が生涯に生む子ども数と合致しません。なお合計出生率は、女性が生む子どもの数である出生力（しゅっしょうりょく）の指標の一つです。

世界の国々にはまだ出生力が高い国がいくつもあります。2022年の合計出生率が高い国からニジェール（6.8）、ソマリア（5.7）、コンゴ民主共和国（5.5）、マリ（5.5）とアフリカ諸国が名を連ねます²。生物学的にみれば同じヒトという種であるにもかかわらず、なぜ出生力にはこれほど大きなちがひがあるのでしょうか。現代は避妊や人工妊娠中絶といった手段がありますから、経済状況や社会文化的規範などに応じて子ども数を意図的に調整していると説明することもできるでしょう。しかし人為的な出生調

節の手段のない集団においても、合計出生率はおよそ4から10までの範囲に広く分布していました。人為的な出生調節をしない集団のことを自然出生力集団、このような集団において観察される出生力のことを自然出生力といいます。

自然出生力集団の研究は、フランスの歴史人口学者ルイ・アンリによって本格的に開始されました。歴史人口学は教会に伝わっていた洗礼・結婚・埋葬の記録から過去の人口動態を復元して分析する学問分野としてヨーロッパで発展し、その後日本では速水融らが江戸時代の宗門改帳等の歴史的資料を用いた大規模なデータベースの作成と人口分析を基礎にした研究分野を発展させました。国際共同研究であるユーラシアプロジェクト³の成果は国内外で発表されていますし、また江戸時代における人口の分析システムであるDANJURO⁴といった貴重で質の高いデータも公開されています。

少し話が逸れてしまいましたが、アンリは自然出生力のことを、人為的な出生調節の存在しない集団における出生力と定義しました。アンリの説明にしたがえば、人為的な出生調節が存在するといった場合には、すでに生まれた子ども数に応じて、これ以上子どもを望まなくなった夫婦が追加の妊娠や出産を意図的に避けるような集団です。授乳期間中の性交禁忌など、次の妊娠を遅らせることで結果的に出生力を低下させるような習慣がたとえあったとしても、これらの行動がすでに生まれた子ども数によって変化するのでない限りは、人為的な出生調節のされていない自然出生力集団とみなされます。このことはアンリが「生理的出生力」ではなく「自然出生力」とよんだ理

由です。つまり自然出生力には生理的要因だけでなく社会的要因も影響を及ぼしているのです。

実際に人為的な出生調節があるか否かを判断するのは難しい問題です。その理由は（1）追加出生の意図の有無を知るのが難しいことと、（2）何らかの手段によって次の出産を遅らせたとしても、それが単に出産時期の延期を意図したものなのか、あるいは最終的に生む子ども数を減らすことを意図したものなのかを判断し難いことによります。すでに亡くなった人々の意図を知ることにはほぼ不可能ですから、過去に存在していた集団の場合は特に難しさが増します。以上のような事情から、ある集団が自然出生力集団であるか否かを厳密に判断することは多くの場合困難です。なお既婚女性の年齢別の出生率のデータから自然出生力か否かを判断する方法も提唱されていますが、この方法にも限界があります。

現在生きている人々についてはインタビューや質問票によって意図を尋ねることができます。もちろん出生意図は出生力に影響しますので、なぜ子どもが減るのかを理解するためには出生意図に影響する社会経済的あるいは文化的な要因について理解することは重要です。しかし往々にして人は意図と行動が合致しません。妊娠を望んでいないにもかかわらず避妊をせず意図しない妊娠や出産を経験する人もいますし、逆に妊娠を望んでいるのにセックスレスの状態にある夫婦もいます⁵。また妊娠を希望して避妊をやめたとしても、すぐに妊娠する人もいれば数年あるいはそれ以上かかる人、あるいは子どもを授かることのない人もいます⁶。妊娠のしやすさにはかなり大きな個人差があることが示唆されますが⁷、なぜこのような個人差が生じるのかについてはわからないことがまだ多くあります。少子化の成り立ちを理解するためには、出生意図およびその関連要因に関す

る研究に加えて、妊娠や出産に直接的に関わる行動や生理学的要因についての実証研究も不可欠です。

引用文献

1. ロイター. 韓国出生率、23年は0.72で過去最低更新 ソウルは0.55 OECD加盟国で最低 [Internet]. ニューズウィーク日本版. 2024 [2024年3月3日アクセス] <https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2024/02/23072055oecd.php>
2. Roser M. Fertility Rate. Our World in Data. 2024 [2024年3月3日アクセス] <https://ourworldindata.org/fertility-rate>
3. 麗澤大学 人口・家族史研究プロジェクト. [2024年3月3日アクセス] <https://www.fl.reitaku-u.ac.jp/pfhp/eurasia.html>
4. 江戸時代における人口分析システム (DANJURO) [2024年3月3日アクセス] <http://www.danjuro.jp/>
5. Konishi S, Tamaki E. Pregnancy intention and contraceptive use among married and unmarried women in Japan. Jpn J Health Hum Ecol 2016;82(3): 110-124.
6. Konishi S, Sakata S, Oba SM, O'Connor KA. Age and time to pregnancy for the first child among couples in Japan. J Popul Stud 2018;54: 1-18.
7. Konishi S, Kariya F, Hamasaki K, Takayasu L, Ohtsuki H. Fecundability and sterility by age: Estimates using time to pregnancy data of Japanese couples trying to conceive their first child with and without fertility treatment. Int J Environ Res Public Health 2021;18(10): 5486.



(東京大学大学院医学系研究科准教授／
人類生態学)

案内

本館展示

特別展示『骨が語る人の「生と死」 日本列島一万年の記録より』

会期：2023年9月30日（土）から5月16日（木）（延長しました）

休館日：日曜・祝日、12/30以降の土曜、ほか（開館カレンダーを参照ください）

開館時間：10：00-

17：00（入館は16：30まで）

会場：本郷本館展示場

主催：東京大学総合研究博物館

IMT展示

特別展示『都市 - エドキリエズ』

会期：2024年3月6日（水）から6月2日（日）

会場：GREY CUBE

主催：東京大学総合研究博物館

特別公開『モース日本陶器抄 - 東京大学コレクションから』

会期：2023年11月21日（火）から

会場：MODULE（モジュール）

主催：東京大学総合研究博物館

常設展示『Made in UMUT - 東京大学コレクション』

会期：2023年6月27日（火）から

会場：COLONNADE 2 COLONNADE 3

主催：東京大学総合研究博物館

常設展示『ギメ・ルーム - 驚異の小部屋』

会期：2015年10月02日（金）から

会場：FIRST SIGHT

主催：東京大学総合研究博物館

分館イベント

ソトラボ第11回 植物トーク

小石川植物園大温室のシンボルツリー

日時：2024年4月4日（木）17：00-17：30

講師：川北篤（東京大学大学院理学系研

究科附属植物園園長・教授／植物生態学・植物進化学）

会場：東京大学総合研究博物館小石川分館庭園（休館中につき館内の見学はできません）

モバイルミュージアム

IMT開館十周年を機に、IMTの学術研究活動を担う総合研究博物館と千代田区との初めての地域・学術連携展示が始まりました。

東京大学総合研究博物館モバイルミュージアム『理学部博物場 - 第一号は千代田区から生まれた』

会期：2024年2月15日（木）から2025年2月28日（金）

会場：千代田区役所（6階 区長室前）

主催：東京大学総合研究博物館

ニュース

スクール・モバイルミュージアム

文京区教育センターにて、2023年10月24日から2024年3月30日に『バイオミネラル』を公開いたしました。

IMTイベント

インターメディアテクでは、以下のイベントを開催いたしました。

・2024年3月29日（金）『駐日エクアドル大使館土器寄贈記念式典・講演会』

小石川分館イベント

小石川分館では、館外イベント『AnnEX Lab.ソトラボ』として、以下が開催されました。

・第9回『世界遺産高句麗壁画古墳と関野貞コレクション』

日時：2023年10月13日（金）16：30-17：00

講師：早乙女雅博（東京大学名誉教授／朝鮮考古学）

・第10回『音の風景』

日時：2023年12月1日（金）16：00-

Ouroboros

16:30

講師：森洋久（本館准教授／情報科学・科学史）

学校対象教育実験プログラム

インターメディアテクでは、学校対象教育実験プログラム「アカデミック・アドベンチャー」の募集を行っています。学校行事や授業で当館を訪れる小・中学生を対象に、大学生ボランティアが「インターメディアイト」（媒介者）として一緒に展示物を観察・鑑賞し、自由に対話する体験を通じて、子どもたちが自らの好奇心を拡げ、探求心を深めることのできる創造的な学術探検の機会を提供いたします。

利用日時：水曜日の9時半から12時までの間の約1時間（実施日は応相談、プログラム開始は一般向け開館時間前となります）

利用内容：大学生ボランティアが務める「インターメディアイト」の案内による対話式展示観覧

募集対象：小・中学校の学校団体（国公立・私立は問いません）

利用人数：1団体あたり児童・生徒数4名から60名程度まで

入館料・参加費：無料

申込期限：利用希望日の30日前まで

申込みおよび問い合わせ連絡先：050-5541-8600（ハローダイヤル）

出版

・『東京大学・若林鉱物標本：日本の鉱山黄金時代の投影』

著者：三河内岳

発行：東京大学総合研究博物館（2023年12月1日）

・『インターメディアテク開館十周年記念 特別展示「極楽鳥」』

発行：東京大学総合研究博物館（2024年1月31日）

本館来館者

事前に申し込みのあった主な本館来館者は以下のとおりです（2023年12月1日から2023年1月31日）。

星稜高等学校、江戸川区立清新第一中学校、立藤、青山学院大学古美術研究会OB会 総会、韓国世光学校、福岡県立小倉南高等学校、中野区小学校理科研究会、江戸歩く会、韓国工科大学、東新大学（敬称略）

ボランティアのご協力（本館）

本館では、2023年12月1日から2024年1月31日の間、下記20名の方々にボランティアとしてご協力いただきました。飯干ユミ、金子清敏、金子清子、神田理子、越 章夫、佐藤れい子、添田禮子、竹下勝人、竹内輝子、兵頭 勝、瀧上妙子、船窪英子、古川真由美、星 佳子、細野 剛、水谷浪子、宮崎眞一、柳清勉、山田節子、柚木陽子（敬称略）

ボランティアのご協力（IMT）

インターメディアテクでは、2023年12月1日から2024年1月31日の間、下記8名の方々にIMTボランティアとしてご協力いただきました。尹 杰、川並仁美、古藤 南、中里朋楓、

長谷川智也、三平侑里奈、森 綾乃、谷地美翔子（敬称略）

東京大学コレクション未来基金 2023年度寄付者

本基金は、当館が所蔵する400万点以上の貴重な学術標本資料群「東京大学コレクション」を、維持・発展させるために設立いたしました。多大なご支援をいただき、心より感謝申し上げます。基金の趣旨や活動報告は下記ウェブサイトに掲載してございます。何とぞ、引き続き、温かいご支援をお願い申し上げます。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt146>

今年度寄付総額 1,742,000円（2023年12月末時点）、寄付件数67件。現在までに下記の方々（匿名希望36名を除く）からご寄付を頂きました。福田健二、木谷謙介、東京大学総合研究博物館ボランティアの会、細井将右、宮内伸子、上河 深、岳野万里夫、小川やよい、上野善道、松本理一郎、由良貴紀、宮崎健一、角田多美江、今村保雄、福田直彦、相良隆弘、水島淑之、塚原 舞、茗荷谷章圭、齋藤充生、佐藤順子、稲川正一、後藤正子、古賀敦子、瀬戸口久雄、玉谷康彦、平井理子、清水克郎、佐藤理枝（敬称略）

Ouroboros 第79号

東京大学総合研究博物館ニュース

発行日：2024年3月31日

編集人：金崎由布子・佐々木猛智・矢後勝也

発行人：西秋 良宏

発行所：東京大学総合研究博物館

住所：東京都文京区本郷7丁目3-1

郵便番号：113-0033

電話：050-5541-8600（ハローダイヤル）

F a x : 03-5841-8451

E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp

Designed by Ken Sakamura

Printed in Japan

ISSN 1342-3614

本号の内容は本館ホームページ (<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>)でもご覧になれます。多くの写真はカラーです。